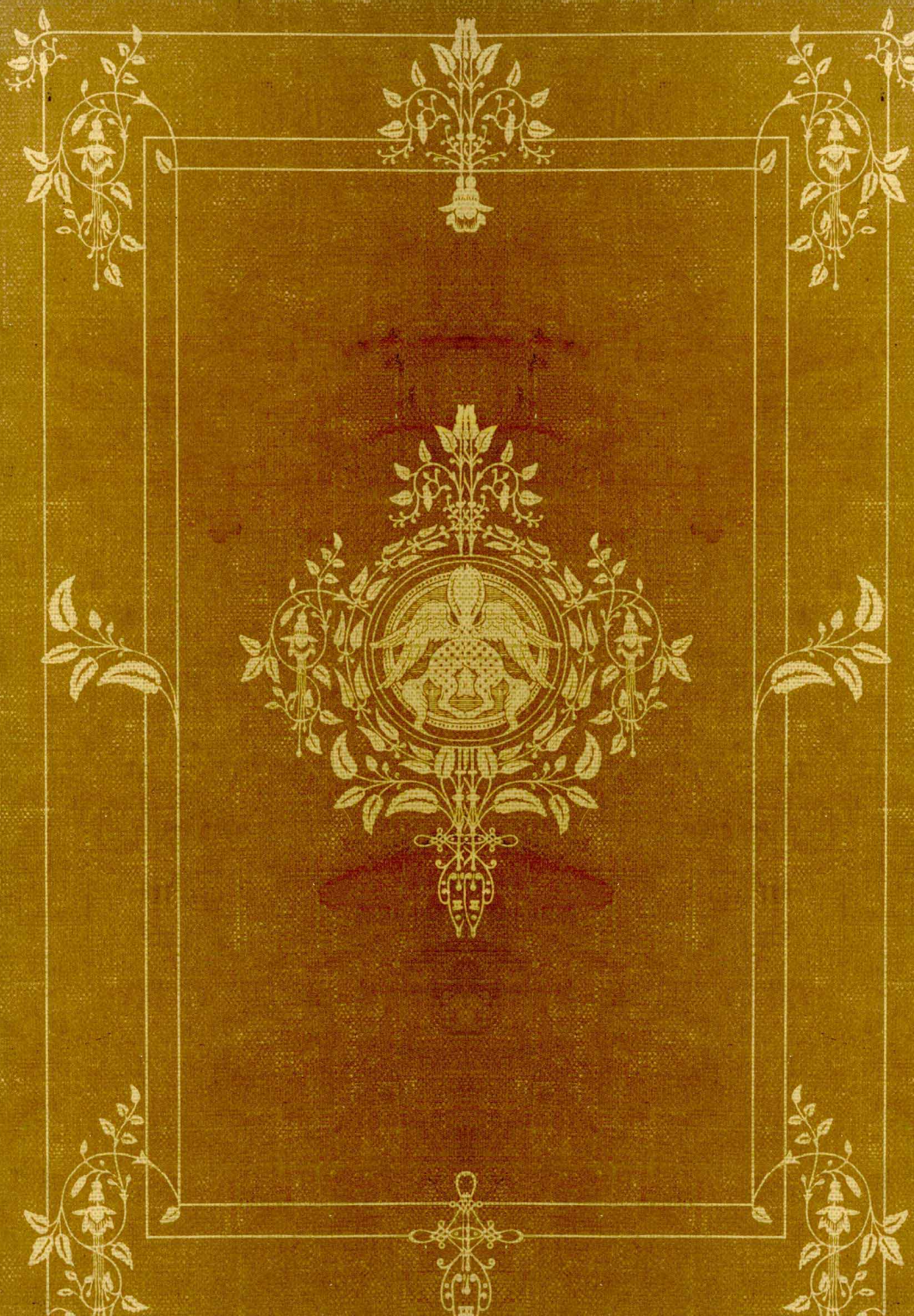




キリスト教文学の世界

22

フォークナー

WILLIAM FAULKNER

スタインベック

JOHN STEINBECK

WILLIAM SAROYAN

主婦の友社

〈著・訳者紹介〉

- | | | | |
|-----|----|----|---------------------|
| つしま | しほ | こ | 1947年生まれ。作家。 |
| 津島 | 佑子 | | |
| いづみ | 島淳 | 秀 | 1913年生まれ。駒沢大学英文科教授。 |
| 飯島 | 淳 | | |
| みづ | 浦朱 | 門 | 1926年生まれ。作家。 |
| みづ | 浦朱 | | |
| おお | 浦暁 | 生 | 1931年生まれ。中央大学英文科教授。 |
| 大 | 浦暁 | | |
| や | 矢代 | 静 | 1927年生まれ。劇作家。 |
| なる | 鳴海 | 四郎 | 1917年生まれ。立教大学英文科教授。 |
| さか | 阪田 | 寛 | 1925年生まれ。作家。 |
| さか | 阪田 | | |

キリスト教文学の世界 22

フォークナー スタインベック
ワイルダー サローヤン

昭和五十二年七月二十五日 第一刷発行

定価 一八〇〇円

発行者／石川数雄

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六

郵便番号 一〇一

振替 東京二―一八〇番

電話 東京(〇三三)二九四―二二一(大代表)

印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありま
したら、おとりかえします。お買い求めの書店
か本社へお申しいでください。

目次

フォークナー

〈解説〉

フォークナーの慰め

短編

津島佑子
飯島淳秀 15

薔薇をエミリーに／ドライ・セブテ
ンバー／あの夕日／髪／ブローチ

人と作品……………飯島淳秀

316

スタインベック

〈解説〉

スタインベックと社会主義

二十日ねずみと人間

人と作品……………大浦暁生

三浦朱門
大浦暁生 93

319

ワイルダー

〈解説〉

『わが町』の宛名は「神の御心」

矢代 静一

わが町

人と作品

鳴海四郎

322

鳴海四郎 訳

172 161

サローヤン

〈解説〉

長い付き合い

我が名はアラム

人と作品

三浦朱門

325

阪田 寛夫
三浦朱門 訳

236 225

フ
ォ
ー
ク
ナ
ー

〈解説〉

フォークナーの慰め

津島 佑子

私がフォークナーというアメリカの小説家の存在を知ったのは、大学生の頃のことでした。私の通っていた大学に、フォークナーきちがい、と呼ばれている若い先生がいました。その先生は、学生にフォークナーの作品しか読ませようとはしませんでした。シェークスピアならいざ知らず、と学生たちは自分たちの知らない一人の現代作家に熱中しているその先生に多少の軽蔑の念を持っていたのです。けれども、その先生のおかげで、フォークナーという名前だけは学生たちの記憶に刻みこまれたのですから、その先生もなかなかの功績をあげた、と評価しなければならぬでしょう。

私もその先生によつてはじめてフォークナーの作品を読んだ一人でした。『薔薇をエミリーに』という、この全集にも収録されている短編小説を最初に読みました。不思議な読後感があったのを憶えています。こうした小説家の作品をこの大学でも正規に扱うのか、とも思い、驚

きました。実は、私の通っていた大学はカトリック系の女子大学で、そうした場では、同じ文学作品といっても、どうしてもカトリックに関係の深い作家、たとえば、グレアム・グリーン、モーリヤックなどを、カトリックの立場から扱う、ということになってしまっているのです。修道院の経営する学校なので、そこでの学問の姿勢もカトリックという宗教をより深く知るためのものになるのも、当然なことではあります。けれども、ともするとそうした姿勢は学生にとって窮屈に感じられるもので、たまにはカトリックのことなどを忘れて、面白い小説を気楽に読みたくなるのです。

フォークナーの作品とそんな大学で出会ったということは、こうした意味で、少なからず、驚くべきことだったのです。どう見ても、フォークナーという人はカトリックの教えを学生たちに理解させるのに有効だとは思えません。『薔薇をエミリーに』ひとつを読んでも、そこに出てくるのは、一人の女の愛欲のすがたなのです。他の『あの夕日』という短編小説でも、同じことです。黒人の女と男の、動物的な愛憎が、遠慮なしに扱われています。この全集には枚数の関係で収録できなかったのですが、長編の方となると、ますますその内容はお上品な人とは縁がなくなっていくます。強姦、近親相姦、無料サービスの娼婦、墮胎、それに、自殺やら集団リンチ、白痴、そして、黒人やインディアンがぞろぞろ出てくるのです。どうにも荒々しくて、びっくりさせられてしまいます。こうした作品のなかで、たとえば『髪』のような短編小説を読むと、本当にほっとするような思いがします。

『髪』は、あるよそのものの床屋の男と孤児の女の子の話です。男は女の子にいつも無料で散髪してやっています。おまけのお菓子まで、他の子より余分に与えています。女の子が最初に床屋に引張られてきた時に、こわがってどうしてもなかに入ろうとしなかったのを、その男がな

だめて、髪の毛を切ってやったのです。それから何年も経ち、女の子は、いわゆるブレイ・ガールになり、男のことなど忘れてしまっています。一方、男には以前に死んだ婚約者の父親の借金を肩代りして払い続けなければならない、という事情があります。払う義務はないのですが、男はその大変な金額のお金を自分からすすんで払っているのです。そんな事情もあって、男は女の子を黙って見つめているばかりです。女の子の髪の毛は、死んだ婚約者の髪の毛と同じだったのです。そして、長年の借金をようやく払い終えた時、今やすっかり身を持ち崩してしまっている女の子と結婚して、郷里に連れて帰るのです。

誰も素姓を知らない、無口な、どこと言って特徴のない地味な男の、ほんの一人を除いて、誰も知らない話です。話の語り手になっている〈私〉だけが、この人も流れものなのですが、たまたま真相を知った、ということになっています。男の特徴のない、地味な性格が、このような設定で語られているので、読者にはその人の顔、体つき、ちょっとした動作まで、まるで自分の知っている人のように思ひ浮かべることができるのです。

この作品は、フォークナーの作品群のなかでは、ちょうど主人公の男のように、地味で目立たない、あまり人にも知られていないものです。が、フォークナーという人が最も深く愛着しているものはなにかということが、よく分かる作品なのです。どんな男とでも遊びまわっている女の子について、町の人たちから、この男はたぶん、幾らでもひどい噂を聞かされていたことでしょう。また、噂は単なる噂ではなく、女の子は安っぽいペラペラの服を着て、口紅を塗りたくって、実際に、娼婦まがいのことをしていたのですから、一般的な人ならば、いくら小さかった頃の女の子に好意を感じていたとしても、あんな風になってしまったら、と辟易して、逃げだしたくなるでしょう。ところが、この男は説教じみたことはなにも言わずに、黙っ

て女の子を見守り続け、自分の方の障害が取り除かれた時に、即刻、ためらわずに自分の妻にして、自分の郷里に、かつては孤児だったこの女の子を連れ帰るのです。

私としては、女の子の方がこのように素直に、男の突然の（妻にしたい、などということ）は、それまでほめかしたとさえなかったのですから）申し出に従うものだろうか、と疑問を感じないでもないのですが、ともかく、フォークナーのこうした女の子に対する、また、女の子への男のこうした愛情のありかたに対する愛着の深さは、十二分に読者に伝わってくるのです。

前の方で書いたように、確かにフォークナーが好んで題材としているものは、世間ではためらいなく悪徳とみなされているものばかりです。小説の題材、もしくは登場人物のタイプは、決して作家の気紛れで選ばれたものではありません。作家自身が気がついていかどうか、は実は確かではないことが多く、フォークナーもたぶん、小説を自分が実際に書いていく上で、次第次第に、あの主人公をもう一度使いたい、もっと大きな世界で、もっと自由に動きまわらせてやりたい、と願う自分の気持から、ようやくなが自分にとっていちばん大事なもののか、知るようになったのではないか、と思います。

『髪』の主人公は、他の作品にも相変わらぬ地味な姿を現わしています。そして、孤児の女の子とそっくりな少女も、いろいろな作品に出きます。たとえば、この全集にも入っている『あの夕日』のキャディーという少女も、そのなかの一人だと言えると思います。

このキャディーは、残念ながらこの全集には入らなかった長編小説『響きと怒り』で重要な登場人物になっています。そこでは、子ども時代は二人の兄、白痴の兄と神経質で非常に頭も良い兄に愛されていた少女、そしてのちの不幸な結婚によって、どんな男とでも付き合う女に

なっていく一人の少女が描きだされています。ところが、この少女が今はどこに在るのかも分からないうちに状態になっていても、両親も死に、家も売られてしまい、なにも子ども時代を思い出すすがなくなってしまう状態になっても、この少女への二人の兄の愛情だけは消えずに残っているのです。白痴の兄の愛情にも、自殺した兄の愛情にも、生きている人間がそのなかで追い立てられ、絶え間ない変化を迫られている「時」は、ほんのわずかでも手を触れることができせん。なぜなら、白痴の世界と死者の世界は、「時」とは無縁の世界、すべてが同時に起こり、すべてが変わらずに持続する永遠の世界だからです。

フォークナーは、私たちが生きているこの現実の世界で、その価値を認められ、報いられるような登場人物をほとんど扱っていません。現実には私の目の前に現われてきたら、私もこわくなるか、気味が悪くなるかして、さっさと逃げだしたくなるに決まっているような登場人物ばかりです。けれども、フォークナーという、この作家はかたくななまでに、「時」の流れに忠実に生きている「現実的」な人たちの盲目ぶりを強調し、そして彼らからのけものにされている人たちに深い愛情を寄せています。『響きと怒り』は、対極的に、現実の荒廃と「時」を超越した愛、を説明して描きだすのではなくて、小説の肉体とも言うべき文章の力で、読者の体に訴えかけてくる作品なのです。力強く、そして透명한美しさを持った見事な作品です。

学生の時に、私はこの作品を読み、以来、フォークナーの世界から体を離すことができなくなっていました。なぜ、地球上の人類が小説というものを思いつき、書き継いできたのか、ただの娯楽、または説教だけが目的だったならば、とくに小説というものは飽きられて、捨て去られてしまっていたことでしょう。小説という器でしか見つめることのできないないかがあるからこそ、どんな時代のどんな人でも小説に無関心ではいられなかったのだ、と改

めて気づかされました。作家によって、このないかの性質は、無論、変わっていきます。が、核は共通しているはずです。フォークナーの作品は、その核をお上品に包みこむことなどは一切せず、読者の前に差しだしているのです。植物は、裸子植物と被子植物との二種類に分けられる、と以前、学校で習ったことがありますが、フォークナーの作品はちょうどこの裸子植物の印象があります。普通、私たちがそのなかに紛れこんで生きている「感情」というものが、フォークナーの作品では減多に現われてこないのです。愛欲や暴力の形で導き出される本能的な生命力のみが作品のなかにうごめいています。

ここに収録されている『薔薇をエミリーに』も、徹底して裸子植物の作品です。不思議な読後感があった、と最初に書きましたが、たぶん、それも、男女の愛情を描いた作品なら、「感情」にまつわる言葉がふんだんに出てくる形式を見慣れていたせいだったのでしょうか。エミリーという女主人公の愛欲の成行きが描かれている小説なのに、エミリーの気持も男の気持も読者に一言も伝えてくれないのです。それどころか、エミリーも男もほとんどその姿さえ現わしてくれないのです。エミリーは死んでしまっているし、男はどこかほかの町へ行ってしまったと、事実は町の人の誰も知らないのに、一応そういうことにされています。二人とも、作者のフォークナーによって、動く口も体の自由も奪われてしまっているわけです。好奇心の強い町の人たちの眼で二人の成行きを見守っているのですが、それではほとんど確実なことが分からず、勝手な推測ばかりで話が進んでいきます。ところが、こうした曖昧さが最後の情景に至り、なんと強い効果を持っていたことか、と気づかされるのです。町の人たちがはじめてその眼ではっきり見届けた情景——そこにもエミリーと男の生きた姿はないのですが——は、死というものによってはじめて生命を与えられたひとつの愛情を、完璧な形で示していま

す。残酷とも言える光景なのですが、むしろ、読者も救われたような気持ちに誘われる、美しく、静かな光景なのです。『薔薇をエミリーに』という題名は、作者の女主人公への率直な心境なのでしょう。

『あの夕日』という短編小説も、やはり、残酷で、美しい作品です。私の最も好きな作品でもあります。ここに出てくるナンシーという黒人の洗濯女は、プライドの高いオールド・ミスである白人のエミリーとは正反対の、売春の常習犯でアル中の、刑務所では首吊り自殺をしこない、亭主がいるのに売春の結果として孕んでしまった、というような、味方になってくれる人など一人も望めない人物です。ところが、このナンシーから読者が受ける印象は、決して醜くも、汚なくもないのです。冒頭に、こんな描写が見られます。

「ナンシーはまず洗濯物のたばを頭のでっぺんにのせると、今度はそのたばの上に、夏でも冬でも一年中かぶる真っ黒な、山の低い麦わら帽をのせた。……ときどき、ぼくたちは彼女について小道を少しばかり行き、牧草地を横ぎりながら平均を保っている洗濯物のたばと帽子に見とれていた。彼女が溝へおりていって、向こう側へ上がっていき、柵をくぐりぬける時でさえ、それは上下にも左右にもぐらつくことはなかった。いつも両手と両ひざをついて四つんばいになって柵のすきまをくぐりぬけるのだったが、頭は微動だにせずきちつともたげて、洗濯のたばも、まるで岩か風船みたいにぐらつきもせず、彼女はまた立ち上がると、歩きつづけるのだった」(P 36)

また、最後の方には次のような描写があります。ナンシーは自分のおなかのことで、亭主に殺される、と怖れ、子どもたちを自分の小屋に引き留めています。

「すると、ナンシーは火の上にかがみこむように坐ったまま、大きくはなかったが、またもや

あの声をたて始めた。長い両の手はだらりと両膝の間にたれていた。不意に汗が大きな粒になつて彼女の顔からふき出し、ぽたぽたと顔をつたつて流れ落ちてきて、その一つ一つの粒が火花のような暖炉の火明かりを映してころころがる小さな玉になり、彼女のおごら落ちていった」(P 50)

醜いどころか、このように美しい女性像に私は感嘆してしまうのです。そして、いかにもフオークナーらしいと思うのですが、ナンシーの雇い主である、子どもたちの母親は、家柄の良い、金持ちの白人なのですが、どうにも意地の悪い、わがままな女として描かれていて、外見としてはナンシーと比べものにならないほどきちんと化粧もしている女なのでしょうが、小説の読者は、この女からできるだけ眼をそらしていただく必要があります。

引用で明らかのように、『あの夕日』の語り手は三人兄弟のうちの長兄になっています。長兄が九歳だった頃の思い出のひとつとして描かれています。ナンシーが美しく見えるのは、彼女を見守る眼が幼い子どもの眼であるためにほかならないのです。あまりにもひどい行状なので、大人たちは一言も子どもたちにナンシーについて説明してやろうとはしません。子どもたちは、ただナンシーのあるがままを見つめ、軽蔑もしないかわりに、特別な同情も感じません。ここでまた、『髪』あるいは『薔薇をエミリーに』で見たような仕組みがあることに、気づかされます。つまり、ナンシー自身も、周囲の人々も、一体どんなものがナンシーの体のかにかあったのか、知ることはできませんでした。行いだけは誰の眼にも明らかだったのですが、それだけのことでした。『髪』では、フオークナー自身の影のような一人の男、『薔薇をエミリーに』ではエミリーの死によってはじめて浮かびあがってきたように、ここでも、子どもの眼によってナンシーのなかにある愛情の形が浮きだされているのです。それは、死と対極に

ある愛欲です。恋愛で言われるような愛情ではなく、本能的な生への執着に駆りたてられている愛欲なのです。

『あの夕日』のナンシーは、小説が終わりに近づくにつれ、ナンシーという一人の人間の皮を失いはじめ、なかでそれまで疼いていた生への執着が膨大なエネルギーの愛欲となって、広い原野に流れていくようです。ナンシー自身はただじっと坐って、怖れおののきながら、その流れを見つめるばかりです。

ここで、たとえばマグダレナのマリアなどを引き合いに出すのは、ちょうど適切なのかもしれません。私が進みません。私の在籍していた大学なら、おそらくこの聖書のなかに描かれている娼婦をナンシーに重ね合わせ、キリスト教における愛の本質をここぞとばかり解くことでしょう。マグダレナのマリアはキリストの愛を最も深く受けとめた一人でした。「心の貧しいものは幸いなり」という聖書中の言葉も思い浮かびます。けれども、私には、僭越かもしれませんが、こうした言葉、あるいは聖書からの解釈をフォークナーの世界に押しつけるのでは、フォークナーの世界の最も魅力的な部分を見失ってしまうような怖れを感じてしまうのです。

作品を自分で読み、ナンシーを見つめる、これは他にゆずることのできない、たったひとつの経験です。ナンシーはナンシーでしかない、ということがいちばん大事なことです。ナンシーは一人しかいません。けれども、ナンシーを突き動かし、怖れさせ、執着させているものは、どの人のなかにも潜んでいると言えるような気がします。私のなかにもあり、そのため、私はフォークナーの作品を読むと、静かな慰めを感じるのであります。

カトリック系の大学でこのフォークナーを学んだことを、私は奇妙なことと思って、大学当

局の修道尼たちはきっと内容がいかなるものか知らずにいるのだろう、と疑っていたのですが、もしかしたら、カトリック系の大学だったからこそ、アメリカ文学の講座に、フォークナ―をあえて選んでくれたのかもしれない。大学を卒業して何年か経ってみると、そのようにも思えてきます。